

# 相對的變化閾發達の客觀的內觀的考察

檜崎 淺太郎

## 目次

### 三、內觀的考察

1. 刺戟閾
2. 新なる意義に於ける刺戟閾
3. 變化閾
4. 辨別閾
5. 變化閾の發達

### 三、內觀的考察

#### 1. 刺戟閾

余は本誌第四十八號大正九年三月に於て、歴覺の相對的變化閾を純客觀的に測定

し其結果其價は練習と共に減少し、練習四週の後に至り二十五分の一乃至百分の一に達して止むことを知つた。この變化閾を規定する心的過程を外、面から考察して、二種の歴覺又は刺戟を辨別するための個人の活動(Tätigkeiten eines Subjektes)と見做し、各個人はかゝる活動の可能性を有して居ると考へるならば、茲に辨別性(Unterschiedsempfindlichkeit) 或は辨別能又は辨別力等の概念が生ずるのである。測定心理學に於て辨別性は辨別閾(變化閾の倒數で示し得ると云ふのは、正にこの意味の辨別性に外ならない。夫故にこの辨別性なる概念は之に應ずる精神生活を其者としてあるがまゝに(wie es für sich ist) 内觀して得た結果ではなくして、これが生活のためにある目的を達するために如何なる役に立つか(wie es in Dienste des Lebens sich betätigt)との功利的な Praktische Psychologie の見地から生じた概念である。

初めて Weber が感覺の感受性を測定し、之が起因となつて辨別性の測定も行はるゝ様になつたのであるが Weber が感受性及び辨別性の測定をしたのは、全く實用的の見地であつた。Fechnerも此點に於ては亦全く同一である。この實用的の見地は、云はず語らずの内に測定心理學の奥底に潜める一興味であつて、従つて刺戟閾又は辨別閾につきても、其數量的確定に没頭し、刺戟閾又は辨別閾を規定せる心的過程を

過程其者として考察する内觀的考察は極めて少い。辨別閾の測定者の中には、時々この心的過程を内觀し之を記述したのもあるが、之等の學者にありても辨別閾の内觀的考察を爲すのが主要なる興味ではなくして、辨別閾の數値に影響を與ふる要素としてのみ、其心的過程を内觀したのである。夫故に今日までのこの方面の内觀的考察は極めて斷片的である。

普通には刺戟閾(Reizschwelle)とは辛うじて漸く感じ得る感覺(eben merkliche Empfindung oder Minimal empfindung)の生起に要する刺戟の量を意味し、之を確定するには吾人の感官にある刺戟を與へて、ある微弱なる感覺を喚起し、其の感覺到應ずる刺戟の量を測定して居る。然らば果してかくして得たるこの數値が嚴察なる心理學的意義に於て、刺戟閾と云ひ得るであらうか。問題はこの Minimal empfindung 即ち最小感覺の内觀的考察から出發しなければならぬ。普通に人は、吾人が暗室にある時には光覺色覺無く、防響室にある時は音の感覺無く、普通の空氣中にある時は嗅覺壓覺無く、口内に何等の刺戟を與へない時、味覺は無いものと考へて居る。そしてこの粗雜な内觀を基礎として、刺戟閾の測定が行はれて居る。けれどもかゝる測定の場合に於て、所謂刺戟として用ひらるゝ刺戟を與へ無い以前に果して刺戟せらるゝ感官に何

等の感覺も存在しないのであらうか。

余は經驗的範圍にありては、意識現象は主觀的並に客觀的條件に基きて成立して居るものと信じて居る。夫ゆゑに全然内外の客觀的條件を除去し、主觀的條件のみによりて現實の意識が成立し得るや否やは、經驗的には決定することのできない形而上學的問題と思つて居る。けれども吾人の生存して居る限りは主觀的條件の外に常にこの客觀的條件が並立し、従つてこの客觀的條件に對應する直接の心的過程たる感覺が感官に存在して居る。防響室にありて吾人は所謂音の刺戟無きに一種の感覺を耳に感ずることができ。そうしてこの感覺は皮膚覺、筋肉覺、運動感覺等とは全く別種の感覺である。又暗室に於て吾人は眼に一種の感覺を覺え、單に空氣中にあるのみなる時に於て指頭に一種の壓覺を感じて居る。かくの如く吾人の感官には常恒の微弱なる刺戟が不斷働いて居るから、感官は常に刺戟闕以上に高められて居り、従つて特殊の刺戟を加へない時であつても、ある種の感覺は常に存在して居る。畏友千葉文學士は之を、固有感覺と名けて居らるゝが(二二五頁)かゝる感覺は少しく内觀を精密にすると直に發見するところのものである。この感覺が全く客觀的刺戟の缺如せる時に於ても依然として成立し得るか否かは疑問であるが、余は

微弱なる刺激に對應して成立せるものと推定して居る。而かして吾人の實用的意識は強烈なる變化に對してのみ注意を向ける傾向が強いから、この微弱な固有感覺を常時は等閑視して居る。加之各感官は順應性を有するか。常に存在せる刺激に對して漸次其感受性が弱くなり、従つて其刺激に應ずる感覺を感ずるの度は漸次減少し、遂に恰も之が存在せざるかの如く思ふに至るのである。かくの如き理由に基き吾人の實用的意識は、この微弱なる感覺を注意しないのであるが、一度この實用的意識の獨斷を脱し、眞に心的過程其者を靜かに細かく内觀すると直に、粗雜なる意義に於て所謂外的刺激の存在せざる場合に、この最幽感覺の常恒に存在せることに氣がつく。

この最幽感覺の存在は常恒であるが、而しこの感覺は全然無變化の儘で存在して居るのではない、不斷變化して居る。Fechnerもかゝる最幽感覺の存在と其變化とを認めて居るが、氏は之を精神物理學の問題以外とした(Sollte überhaupt jede kleinste Reizgröße erkannt werden, so würden wir, da Minima von Reizen aller Art uns stets umspielen, ein unendliches Gemisch und einen unaufhörlichen Wechsel von leisen Empfindungen aller Art verspüren müssen, was nicht der Fall ist. (1)11四九頁)。本來、外的精神物理學(Aeusserer Psychophysik)は刺激と感

覺との關係を其研究の對象とし、感覺其者に對する興味は二次的であるから、Fechnerが最幽感覺其者の變化を考察しなかつたのは當然であるが、純粹心理學に於ける感覺の問題は、刺戟と感覺との關係よりも感覺其者が興味を中心であり、其變化が考察の焦點である。されば先づ我等は最幽感覺の變化に内觀を加へて見る。

最幽感覺に注意を集注して内觀すると、其感覺は常に同一の状態に止ることなく、刹那々に變化する。此變化又は移行(Übergang)に應ずる各感覺は、同一感覺のある色彩(Färbung)の變化であるか、或は新しき性質の感覺であらうか。Wundtは壓覺が皮膚の異なる部分に於て稍異なるの事實を壓覺の局所的色彩(locale Färbung der Druckempfindung)と名けて、これは感覺の性質は略ぼ同様であるけれども、絶對に同一でないことを考へて居る(三三四頁)。今假にWundtの意見に従ふならば、最幽感覺の變化を同一感覺の色彩の變化とも考へられる。けれども色彩の變化とは抑も如何なることか。Wundtは感覺の性質が略ぼ同様で、然も全く同一でない感覺を色彩の變化と云ふ比喩的な表現で示して居るが、感覺の性質が略ぼ同様で全く同一でないとは如何なる意味であらうか、元來感覺とは性質的に最早それ以上分析を許さない所の唯一の性質を有する心的存在である。其性質がähnlichであつて決してgleichでないとするな

らば、こは明に異なる感覺でなくてはならない。然るに Wundt は皮膚の異なる部分に於ける感覺は同一の感覺の色彩の差と考へて居る。Wundt のみならず多くの心理學者は皆かく考へて感覺の局標なる言葉を許して居る。

心理學者がかくの如き見解を抱くに至つた原因は、同一の刺戟は同一種の感官に對して常に同一種の感覺を起すものであるとの臆測に基いて居る。けれども、純粹心理學の見地から見ればこの臆測は許容せられない。心理學的に感覺の性質を確定するに當りては、外的刺戟又は感官の種類を直接に考察するの要はない。我々は感覺其者の性質を内觀し、内觀的性質に於て差異あれば、之に分析を加へて最後の單一性質の状態に進まねばならぬ。故に若し感覺に移行の感じが起つたとせば、其感覺は前行の感覺とは別種のものと思ひべきである。唯兩者の差異が明かに意識せられないから、一般の學者はこれを感覺の色彩の變化などと解釋するに至るのである。けれども内觀的には已に感覺其者の性質が變化し、新しき性質の感覺が現出して居るのである。されば余は最幽感覺の變化は、新感覺の發生に基くと考へる。

本來感覺の性質とは、吾人が心的過程に對して分析的態度を持し、この態度を徹底的に維持して其究極に達した時に得らるゝものである。普通に心理學者は同一振

動數を有する發音體の振幅の多少に應ずる感覺の變化を、同一感覺の強度の變化と見做し、同一發光體の距離の大小に應ずる感覺の變化を同一感覺の強度の變化と考へて居るが、これは感覺其者の考察から來つた概念ではなくして、外的刺戟の特徴から心的過程を類推的に反省した結果である。余は前に感覺から強度の概念を驅逐したが、(四)又茲に同一感覺の色彩なる概念も除去したい。そうして從來「色彩の變化」として考へられて居た感覺の特質は性質の差異となすの正當なるを信ずる。Wundtもこの色彩の變化を、ある場合には性質の差異とも考へて居る(三四頁)。

この感覺の性質の差異は時として外部の刺戟に基き、時として内部の心的條件に基いて現はれる。若し其差異が外部の刺戟に基いて現はれた場合には、各種の感覺に應ずる刺戟の最小量がある。そして其最小量は、感覺の性質の種類のあり得るだけの數が存在する筈である。普通には壓覺、味覺、光覺等には唯一の刺戟閾が存在し、この刺戟閾は該感官を刺戟して最幽感覺を出せしむる最小刺戟量とし用ひられて居る。然るに最幽感覺は人爲的の刺戟を加へざる以前に已に存在して居るとすれば、かゝる意義に於ける刺戟閾なるものは、經驗的には到底確定することの出來ないものとなる。Wundtも既にこの點に留意し其測定の不可能を論定し(五五六一頁、千

葉文學士も其絶對的意義に於て之を否定して居らるる(一二五頁)。この概念を應用心理學に於て相對的或は便宜上の意義に用ゆることは、人々の自由であるが、科學的心理學の概念としては一義的たることを要する。

Weberを先達とし Fechner, Wundtを経て發達した實驗心理學では、刺戟閾の概念は上に述べたる如く規定しながら、實際の測定は、感官に常恒的に働いて居る Wundtの所謂 permanente schwache Reizeの上に、更に人爲的の刺戟を加へ(五)五六一頁) Fechnerの所謂 leise Empfindung(二)二四九頁)に極小の變化を與へ得る刺戟量の極小値を確定して居るのである。即ち普通に測定せられて居る刺戟閾は leise Empfindungに極小の變化を與へ得る刺戟の最小量である。この數値は勿論測定が可能であり、又ある程度の心理學的意義があり、又應用心理學から見れば、この數値は精神の診斷學的意義を有する。さればかゝる意義の刺戟閾を測定することは一個の心理學的事業に相違無いが、余は其意義の確定を欲する。何となればこの意義が確定しないと、心理學の全組織の中に占むべき地位が明らかでなく、従つてこれが心理學的價值確定せず、爲めに種々の誤解と謬見とを心理學に輸入する起因を作るからである。

若し刺戟閾を以て最幽感覺(leise Empfindung)に極少の性質的變化を起す最小刺戟

量と見る時は、この刺戟閾は普通の辨別閾の特殊の場合に過ぎないものとなる。辨別閾とは一定の感覺に極少の變化を與へ得る最小刺戟量であるが、この一定の感覺に對する制限が辨別閾の場合には存在しない。如何なる感覺でも差支へが無い。然るに普通の刺戟閾の際の標準は、最幽感覺の極小の變化に限定せられて居る。故に辨別閾を徹底的に測定するならば、其一つの場合として刺戟閾も測定せられて居る筈であり、又内觀的に見るも兩者の間に根本的の相違は無く、兩者全く同一の心的過程である。

今 Fechner の *leise Empfindung* E にある刺戟  $R'$  を加へると  $E'$  なる感覺が現はれ、この  $E'$  にある刺戟を加へると  $E''$  なる感覺が生ずる。かくして  $E, E', E'', E''', \dots, E_n$  なる感覺の系列に應ずる  $R, R', R'', R''', \dots, R_n$  なる刺戟の系列が成立する。この場合に於て E は *leise Empfindung* である、 $E_n$  は *permanente schwache Reize* である。そして  $R_{n-1}$  が普通の刺戟閾で  $R_{n-1}, R_{n-2}, R_{n-3}, \dots, R_{n-1}$  等が辨別閾である。即ち刺戟閾は辨別閾の特殊の場合に過ぎないのである。

それならば何故從來の心理學者が兩者を明かに區別し、別々に測定したかと云ふに、それは全く精神の客觀的考察に興味を有して居つたからである。前にも述べたる

如く Weher を初め多くの測定心理學者は精神作用を一種の能力と見做し、外物の知覺力及び辨別力の測定に熱中した。かゝる見地に於ては精神は如何なる極小又は極大の刺戟を知覺し得るか、又この極小極大の範圍に於て刺戟の差異を如何なる程度まで辨別し得るかは、精神能力の検査の中心問題に相違ない。従つて彼等は刺戟、刺戟頂辨別閾の測定に突進したのである。そうして *permanente schwache Reize* に注意することなく、人爲的に極小の刺戟を感官に加へて刺戟閾を確定し、二種の刺戟を同時又は繼起的に加へて其辨別閾を測定し、主として前者に生理的意義を與へ、後者に心理學的意義を認めた(五五六一頁)。

## 2 新なる意義に於ける刺戟閾

上に述べた様に普通に使用せらるゝ刺戟閾は、辨別閾の中に抱括することができ、るが次ぎに來る問題は、辨別閾なる名稱の適不適である。この辨別閾なる名稱が、全然客觀的見地より與へられたるものとすれば其名稱は適當であるが、内觀的特徴に基き内觀的性質を指示するものとせば余は其不當なるを感ずる。今指頭の先端に一定の重量  $R^1$  を加へて一定の感覺  $R^2$  を喚起し置き、次ぎに其  $R^1$  に一定量を加へ或は減ずる時は  $R^1$  は  $R^2$  又は  $R$  なる感覺によりて掩はれたために  $R^1$  感覺は自ら消滅するの

である。そして内觀的にはEが消えてE'又はE'なる新なる性質の感覺が現はれたと感ずる。而して其際EとE'とを比較して其差異を辨別したと云ふ感じは少しもない。この場合に於て吾人の注意を引くは新なる感覺の發生といふ感である。されば其際に働いて居る外的刺戟の量は、新感覺の發生に必要な刺戟の最小量であるから、新なる意義に於て之を刺戟閾と云ふこともできる。普通に刺戟閾と云へば、最幽感覺の存する際に更に新なる感覺の現出するに要する最小刺戟量であるが、茲に新なる意義に於ける刺戟閾とは新しき性質の感覺を喚起するに、必要な最小刺戟量である。そうしてこの新感覺の現出する直前の感覺の性質に、何等の制限を加へない點に於て普通の刺戟閾と異つて居る。

今茲に述べた様な意義に於て刺戟閾を使用する時は、刺戟閾は感受性を指示する指數となるのみならず、其の數は感覺の質的差異の數を示し、又感覺を客觀的の方便に於て記述する際に於て、有力なる表現の手段となるのである。我々は幾千種の感覺の質を區別するが、其一々に應ずる表現の言葉を有して居らぬ。又其一々に應ずる異なる言葉を創作することは、到底其煩に堪えない。既に現在に於ても音覺に對する表現は、主として物體の振動數で示して居るのであるが、余は感覺の質の客觀的記

載を其感覺を喚起した最小刺戟で記述したい。即ち、幾何の刺戟量にて刺戟した時の感じと云ふ風に記述したい。そうすれば何人も其記述に基いて、其處に記述せられた感覺を自ら經驗して見ることが出来る。夫故に余は感覺の記述は、新なる意義に於ける刺戟閾にて記述するのが最も客觀的で而も科學的であると思ふのである。

内觀的性質其者を其儘に記述する手段は何人にも與へられて居らぬ。吾人が之を他人の理解に訴へんと思ふ時は、必ず何等かの符號を使用しなければならぬ。而して其符號として一般には日常使用する言語が使用せられて居る。言語は内觀的性質の粗雜なる輪廓を描くには適當であるが、詳細なる記述に當りては、極めて漠然たるのみならず、種々の誤解と誤謬とを透導し易い。夫故に誤謬と誤解とを出来るだけ縮小し、出来るだけ精密なる記述を爲さんと欲する時は、感覺を生起したる刺戟の術語にて記述すべきである。又出来るならば刺戟其者にて記述するがよい。余は音の感じを其儘記述するには蓄音器に學び、色彩感覺の記述は色彩其者を手段として記述したならば、どうであらうかと考へて居る。

新しき意義に於ける刺戟閾に對して現れた新感覺と、其直前の舊感覺とを比較して之を統一的に把握せんとする態度を取ると、同一性質の刺戟に應ずる新舊兩感覺

は相互に統一的に把捉し易く、異なる性質の刺激に應ずる新舊兩感覺は統一的に把捉することがむづかしく、兩者は相互に自己の獨立性を主張するが如くに思はれる。二つの感覺の統一的把捉の態度に對して現はるゝこの兩様の特徴が、感覺の性質的差別の第二の標徴である。夫故に感覺の質的差別に絶対的と相對的とがある。發生したる感覺に對して、分析的の態度を取る時は、それが他の感覺と何等かの區別を示す時は其の感覺は、他の感覺と質的差異があると判定する、こは絶対的意義に於ける質的差異である。然るに絶対的意義に於て質的差異を有する二種の感覺も、之を統一的に理解せんと欲する態度に於てはある種の感覺は何等かの類似點又は共通點がある様に思はれる。換言せば小異を捨て、大同を漠然と選擇するとができる。例へば皮膚の各部に於ける壓覺は其分析的態度に於ては、局所々々の壓覺は其質に於て已に *Wundt* の指摘した様に決して同一では無い。けれども其小異を捨て、統一的に理解せうと思へば、同一種の感覺として把捉することもできる。これが多くの學者が皮膚の各部の特殊の壓覺を厭覺なる一般概念にて概括し、各部の特殊性を有する壓覺を壓覺の局所色彩 *lokale Färbung der Druckempfindung* (三四頁)と名ける所以である。眞に分析的態度を徹底するならば、壓覺の局所色彩は壓覺の質的相違であ

るが、統一見地に於ては局所色彩は副次的意義を與へらるゝに至るのである。Wundtは感覺の性質のこの絶對的、並に相對的意義を明かに區別して居らぬから、氏は感覺の質的決定に於て常に矛盾を感じて居る。例へば壓覺の性質の記述に於ても、次の如く曖昧な表現を用ひて居る。Die Druckempfindungen, die durch die einzelnen, räumlich gesonderten Teile der Hautoberfläche vermittelt werden, sind zwar in ihrer qualitativen Beschaffenheit einander ähnlich, aber sie gleichen sich keineswegs vollständig. (III) 四頁。

### 3. 變化關

同一の局所を同種の刺戟で刺戟し其刺戟の量を變化せしめ、之に應ずる感覺を分析的態度に於て内觀する時は、各の刺戟關に應ずる感覺は皆質的に異つて居る。然るに之等の感覺を統一的に理解せんとする時は、同一刺戟の量の相違に應ずる感覺は、ある一概念に抱括し易いのである。かくの如く分析的見地に於ける質的相違の感覺を、統一的見地に於て一概念に概括し、この概括の結果を固守しながら、分析的相違を認定すると茲に感覺の強度なる概念が發生するのである。故に感覺の強度なるものは、分析的態度に於ては質的相違に當るのであるが、統一的態度に對しては強度又は局所色彩となつて現れる。夫故に統一的統度に於て二種の感覺を比較する

と、直前の感覺Eが現存の感覺E'に變化したと考へられる。即ち統一的態度に於ては變化の意識が特色を爲すから、この點に留意し變化の意識を喚起したる刺激の量を變化閾(Veränderungsschwelle)と名けることができる。今日多くの學者が辨別閾と名けて居るものは、其内觀的特徴から見ると變化閾と云ふべきものである。

#### 4. 辨別閾

既に Fechner の指摘した様に(六)八二頁、我々は感覺の差別として感ずることなくして、ある感覺を他の感覺から區別することができると。この場合に於ても心的態度は統一的であるが、明かな *ein Hand im Bewusstsein* が成立して居なく。従つて *Empfindung eines Unterschiedes* と *Unterschiede von Empfindung* とは明かに區別しなければならなく。變化閾の場合に於ては後者の意識はあるが、前者の意識は其主要素ではない。感覺の差違の意識は、單なる感覺の差異よりも一層高次の意識活動(höhere Bewusstseinsact)である。この意識に於ては多くの感覺間の比較が行はれ、*das Bewusstsein einer Beziehung zwischen denselben* が成立して居ると Fechner が述べて居るが(六)八六頁、かくの如き特徴を有する意識が成立する際の客觀的刺激的の最小量が眞の意味の辨別閾である。從來多くの心理學者はこの變化閾と辨別閾とを混合し、この何れの場合に於ても之

を一般に辨別閾と名けて居るが、之を内觀的に考察すれば兩者は明かに順位を異にする意識活動であつて、辨別閾は變化閾よりも更に高次の意識活動に對應するものである。又單なる感覺の意識 (einfache Auffassung einer Empfindung) に對應する刺激閾は變化閾よりも更に下次の意識活動である。

かくの如くに識閾の概念を心的現象の内觀的特徴に基きて種々に區別する時は、心的現象觀察の分析的態度に對しては無數の質的差異に應じ無數の刺激閾存在し、統一的態度に對しては、質的差異の統一的關係の差別に應ずる數種の關係閾 (Verhältnisse) が存在することとなる。そしてこの關係閾は下次のものより漸次に高次に進み、各種の關係は遂に Bewusstseinsheit に於て絶對最高の關係閾に達する。

##### 5. 變化閾の發達

本誌第四十八號に記載したる變化閾發達の客觀的考察に於て、練習初日の標準重量 (S) を一〇〇〇瓦、變化重量 (V) を五、五瓦と爲して變化閾を測定せしに、被験者今村さゆ嬢にありては、正判断數は六〇%であつたが、二日には六九%、三日には九一%に達して居る(七五九頁)。この正判断數の増加は客觀的見地或は應用心理學的見地から見れば辨別性の發達と見らるゝのであるが、内觀的には一〇五五瓦及び九四五瓦に

對する新しき感覺の發生の度數の割合の増加である。練習初日に於ける被驗者楢崎のこの兩刺戟に對する正判斷數は三五%であつて、新感覺發生の割合は前被驗者に比し、著しく少い。然るに二日には五〇%、三日には五七%、四日には七五%となつて其數の次第に増加せるは、(七六〇—一六二頁、内觀的には新感覺發生の度數の増加を示すのである。

被驗者今村嬢練習八日、九日、十日の正判斷數を見るに、何れも九〇%以上に達して居る(七五九頁)。此結果によれば前記の兩刺戟に對し、新感覺の發現度數は殆んど完全の状態に達して居る。以後練習を二十日間繼續せしに遂に九四、五瓦、九五瓦、九六瓦、九七、五瓦、九八、瓦、九八、五瓦、九九瓦、一〇〇瓦、一〇一瓦、一〇一、五瓦、一〇二瓦、一〇二、五瓦、一〇三瓦、一〇三、五瓦、一〇四瓦、一〇五瓦、一〇五、五瓦の十七種の刺戟量に對して新しき感覺を容易に生じ得るに至つた。練習初期にありては一〇五、五瓦及び一〇〇瓦、九四、五瓦に對してのみ異なる感覺の發生を極めて不完全に起して居つたのであるが、練習末期にありてはこの三種の中間に位すべき新感覺十四種を發現するに至つて居る。して見れば練習による變化閾の減少は客觀的には變化の知覺能の發達と見らるゝのであるけれども、内觀的には新感覺發生の過程の増進であり、客觀的に兩刺

戟の差の辨別能の發達は内觀的には新感覺の發生が其基本的條件を爲すのである。被験者植崎に於ても上の事實は同様であつて、唯少しく其程度を異にするのみである。即ち本被験者にありては、練習初期にありては、九四、五瓦、一〇〇瓦、一〇五、五瓦に對して各特殊の感覺が現れて居たのであるが、練習後期にありてはこの刺に對し戟の外に、この刺戟の中間に位する九五瓦、九六瓦、九六、五瓦一〇三、五瓦、一〇四瓦、一〇五瓦の六種の刺戟に對して新感覺を發生し得るに至つた。即ち今村嬢は練習三十日にして十四種の新感覺を、植崎は六種の新感覺を發生せしむることができた。一般に感覺の練習は感受性を高めるものとして考へられ、辨別力の練習は辨別性なる特殊の心能を昂進せしめるものゝ如くに考へられて居るけれども、この際に現はるゝ現象を内觀すると兩者の場合に於て其基本となるものは新感覺の發生といふ興味ある事實である。即ち我等は練習によりて、ある能力を増進せしむるのではない。練習によりてある能力を増進せしむると考へるのは、應用心理學の立場から、客觀的に心的現象を考察した言ひ現はし方である。内觀的には從來經驗しなかつた新なる心的現象が現はれることである。而して感覺の練習の場合に於ては、普通の人の經驗することのできない所の性質の異つた新感覺が生起し、感覺の世界が漸次に豊

富となることである(元)。

本稿は猶細かに考へ、詳論すべき筈であつたが、諸種の事情は暫時之を許さない。それで遺憾ながら其輪廓のみを描き、詳細は後日期を得て再考することにする。

- (一) 文學士 千葉胤成 識別作用の非相稱につきて 日本心理學雜誌第一卷第一號 大正八年七月
- (二) Fechner, G. Th. Elemente der Psychophysik, Erstertheil, 1860.
- (三) Wundt, W. Grundzüge der Physiologischen Psychologie, Zweiter Band, 1910.
- (四) 稻崎淺太郎 感覺の強度に関する疑義 哲學研究 大正八年八月
- (五) Wundt, W. Grundzüge der Physiologischen Psychologie Erster Band, 1908.
- (六) Fechner, G. Th. Elemente der Psychophysik Zweiter Theil, 1860.
- (七) 稻崎淺太郎 相對的變化關發達の客觀的內觀的考察 哲學研究 第四十八號大正九年三月